

楽

司馬遼太郎全集 第八卷

第十回配本 尻啖え孫市 他

八八〇円

昭和四十七年六月三十日発行

著者 司馬遼太郎

発行者 檜原雅春

発行所 株式会社文藝春秋

〒102 東京都千代田区紀尾井町三
電話(代表)〇三二六五一二一一

印刷所 大日本印刷

製本所 大口製本

製函所 加藤製函

万一落丁乱丁の場合はおとりかえ致します

© RYOTARO SHIBA Printed in Japan

0393-510080-7384

尻咲え孫市

司馬遼太郎全集 8



司馬遼太郎全集第八卷

尻啖え孫市 5

短編

言い触らし団右衛門 361 花房助兵衛

売ろう物語 399 おれは権現

侍大将の胸毛 419 軍師二人

雨おんな 455 愛染明王

覚兵衛物語 477

司馬遼太郎の世界 尾崎秀樹 571

A 題 装
D 字 幀
粟 中 三
屋 田 井
充 功 永
一

屍啖え孫市

赤羽織

元龜元年二月。

城下にえたいの知れぬ男が入ってきた、といううわさは、その日のうちにひろまった。

いやもう、傍若無人。

ちやうど城外の長良川畔で諸国の博勞があつまる馬市が立っていたが、

「この馬はなんぼじゃ」

と、その怪漢が野太くきいた。

——金二枚よ。

と博勞がいうと、

「安いのお。あとで旅館へ曳いてこい。余分は酒でもくらえ」

と、むぞうさに金をつかみ出し、なんと金で五枚、ちらりと投げ捨てた。

(狂人か)

と、みな思ったのもむりはない。風体は、真赤な袖無羽

織、真白になめした革ばかま。腰には、古びた黄金づくりの大小を帯びている。

それに二尺ほどの大鉄扇を持ち、従者がふたり。——その従者の一人は、旗をかついで背後でかしこまっていた。旗には、

日本一なんのなに某

墨はだいぶ、風雨にさらされてかんじんの名前は読めないが、とにかく「日本一」らしい。ただし、なんの日本一かはわからない。

くるり。

うしろをむいて、町の雑踏のほうへ男は足をむけた。背中で、烏がとびたっている。むろん黒く染めぬいた絵で、この男の定紋らしいが、その烏は、足が三本。

「熊野烏だな」

と、物識りは知っていた。熊野の神鳥で、伝説の八咫鳥である。神武天皇を大和へ先導したというあの神話の鳥のことだ。むろん実際は人間で、いや神様で、賀茂建津命といい、神社は天下に三力所ある。しかし、この烏を定紋にしている男というのも、めずらしからう。

とにかく、巨漢である。

それが、ゆっくりと城下を歩く。

眼はぎろつとしてゐるが、口もとに愛嬌があつて、顔のなかに涼風が吹きとおつてゐるようすがすがしい感じの男だ。

「まったく、めずらしい町だな」

男は、この新興都市のにぎやかさには、すっかり気に入つたらしい。大げさにいえば異国にまぎれこんだような、風変りな町である。

男は、町をあるく。

事件はこのあとでおこるのだが、その前にかれが歩いてゐるこの異風な都会を説明しておかねばなるまい。

名を、岐阜という。

——いやまったく。

と、かれよりも三、四年前にこの町にきたポルトガルの宣教師ルイス・フロイスは、その書簡のなかで驚嘆してゐる。

われわれは岐阜城の町について。人口約一万であらう。和田どの(惟政・高山右近の実兄)が指定した旅館に入つたが、その騒々しいこと、バビロンの混雑に似ている。各国の商人隊が、塩、布、その他の物産を馬に積んでこの町に集まり家々は雑踏してなにもきこえず、あるいは賭博し、あるいは食し、あるいは売買し、あるいは荷造りし、あるいは荷を解く者、昼夜絶えることがない。

旅館はどうも静かでない。だからわれわれはみな二階にいた。私の紹介状の宛てぬしである高官(木下藤吉郎秀吉)はちやうど尾張に出張中で、柴田(勝家)どのも佐久間(信盛)どのもまだ京都から帰つておらず、そのため王の前に出ることができなかった。たまたま右の二人が京都から帰つてきたので、まず、王の軍隊の総隊長である佐久間どのを訪問した。(中略)

私は、王の宮殿をみた。私が建築家ならもつとすばらしい描写をすることができるとは、とにかく、わが故国ポルトガルから印度そして日本にいたるまで、私が今までみた宮殿のなかでこれほど精巧美麗清浄な建築はない。(後略)

王とは、織田信長のことである。かれは岐阜王であつてしかも諸方に軍隊を出し、天下をねらう野望に燃えていたこの日。

というのは、真赤な袖無羽織の壮漢が城下に入つてきた日、たまたま在館して、京からまねいた幸若舞を見物してゐた。諸芸諸事、極端にもものずきな男だが、この幸若舞がとくにすきで、自分でもへたな玄人ぐらいには演れる。

城は背後の稲葉山(金華山)上にあり、信長の居館はその山麓にある。フロイスがおどろいたのはこの居館の豪華さで、「内部の諸室はまるでクレタの迷宮である。四層の建

物で、一階は十五から二十のザシキと称する美麗な室があり、黄金の屏風には、純金の釘、緋金がつかわれている。二階は王妃と侍女の休憩室、三階は茶を喫する部屋、四階は望楼。ここから城下の高官の屋敷、町家がひと目でみえる」といつている。

舞がおわつてから、王、いや信長は、三階の茶室にひきとつて、御伽衆から、城下のうわさ、諸国の見聞などをきいた。

御伽衆とは、当時の戦国武将のそばにつかえ、耳学問をさせる役目である。敗亡した名家のなれのはての老人もおれば、歴戦の老武者、禪坊主、学者、絵師など前歴はさまざまなものだ。

きよらの番は、城下に町住いする範のう、という絵師で、信長はこの男の癖で、いつも胃の重そうな顔をして聴いている。

相槌も、うってやらない。

ときどき、幼少のころからの口癖で、

「デアルカ」

と、つぶやく。あとは眼を閉じている。

が、この瞬間だけは、異例だった。

「なに、熊野鳥の紋所の男？」

「いんと眼をひかした。せきこんで、

「その男、名は雑賀と申さんだ。雑賀孫市」

といった。

「さあ、名乗りのほどは。――」

「話をつづける」

その赤羽織の熊野鳥。――

町の雑踏をのしあっている。従者が例の旗を捧げもち、もう一人の従者が、青貝をすりこんだ三間半の槍をもって

いる。

妙なことに、この奇矯な男にどういふ威厳があるのか、男が大路の中央をあるくと、さしも喧騒な町が、すーっ、としずまる。みな声をのむのである。

もし例のフロイスがこの光景をみれば、この旅の武士こそ、岐阜王ではないかとおもったことだろう。

が、不幸がおこった。

男のむこうから、槍組の足軽一隊をつれた騎乗の武士が進んできたのである。

この城下の習慣で、町民はいつせいに軒端に身を寄せて、織田家の隊伍を通すことになっている。

しかし、赤羽織は進んでゆく。

「退けっ」

と、馬上の足軽大將は叫んだ。同時に、配下の足軽数人が、槍をさかさまに構えて、赤羽織を棒突きに突こうとした。

「なんじゃい」

赤羽織は、白い歯で破顔わがんった。しみとおるように入懷うちつこい笑顔だった。

「この道は通れんのかい。織田殿の新城下といえは、楽市楽座、天下のあきゆうど、天下の武士、牢人ろうにん、雑人ざくにん、河原者がわらものにいたるまで自由自在に出入りせよ、という評判をきいてわざわざ遠い郷国からやってきたが、聞くとは相違、道も通れんのか」

どうやら怖おそいもの知らずらしい。

「だいぶ異風いふういて不良化しておるやつらしい。打擲うちちやくして、織田ぶりをみせてやれ」

と、馬上の足輕大將が、鷹揚おうように命じた。

「おうさ、かしこまった」

どつと、足輕は声をあげた。このころの足輕ときたら、殺伐ころはくを絵にかいたような曲者まがものぞろいで、人を殺してなまずにするなどは、屁ちともおもっていない。

わつ、と飛びかかった。

ところがどういうものか、赤羽織は、その棒突きの槍ぶすまの中で、ひらひらと手ぶりおかしく舞いはじめた。

舞うと同時に、足輕が、三、四人と、小石のようにはねあげられては、地に落ちる。

——そのとき、黒旋風くろせんぷうがおこったそうにおじやります。見ていた町の者は、あれは天狗じゃ、鞍馬くらまの太郎坊でも人

に化けて踊おどじたのであらうと、齒の根もあわず、蒼あおうなつて申しましてござりまする。

と、御伽衆の絵師はいう。

「ふむ。——」

信長は、それには興味がないらしい。

現場では、——むろん黒旋風などはおこらないが、赤羽織はするすると槍ぶすまの隙間ひまを縫い、縫ぬいっては投げ、投なげては身かわしてさんざんにかからなかったあげく、騎馬武者の馬の前脚二本を抱きすくめ、

「えいっ」

ともいわず、馬をあおむげまにひっくりかえしてしまつた、という。

「馬鹿力な男もあるものよ」

と、これも信長の興味をひかない。

「つづけろ」

「へっ。——それで」

「それでどうした」

「ゆうゆう、赤羽織は、宿舎にひきあげたげにござりまする」

「伊賀守いがのまもりをよべ」

へへつ、と近習きんしゅうが、すばやく膝ひざをしりぞかせつ、座を立たった。

入れかわって、町奉行の和田伊賀守へがのまもりが平伏へいふくした。

「聞いたか」

例の一件を、である。が、信長は、述語だけをいう癖があつて、主語は、家臣が想像するほかない。自然、鋭敏なカンを要するのだが、これは、木下藤吉郎が特技とした。この男の異数な出世は、ひとつは、信長の言葉を機敏にききわけたからだろう。

「聞きおよんでおりまする」

伊賀守は、あてずっぽうでいった。

「あの赤羽織、そつとしておけ。かまえて、手を出すな」

「へへっ」

やつと、例の一件がわかつた。

「猿はおるか」

と、ふりかえつて、また近習へ。

「はっ、屋敷に在せられまする」

「呼べ」

と命じ、あとは、手首をふつた。消えろ、という意味である。

町奉行も御伽衆も、あわてて膝を擦り、信長の視野からのがれた。絵師や町奉行が察するところ、どうやら、信長は、赤羽織に強烈な関心をもつたらしい。いやそれも、赤羽織の神仙じみた怪力よりも、その紋所に関心をもつたようであつた。

——猿を呼べ。

は、尋常の関心ではなかつた。猿でなければつとまらぬ密用があるらしい。

(何者であらうな)

絵師の範のうにはわからない。

町奉行の和田伊賀守は、あるいは遠国の大名が、忍んで岐阜の城下にきたのではないかとみた。

(大名。……しかも熊野鳥の紋所の。はて、左様な紋所の大名がいたかな)

乱世である。今日の地図はあすの用に立たぬほどに、諸国の治乱興亡ははげしい。東国か西国か、あるいは、佐渡、壱岐などの海のむこうには、そんな出来星大名が、ひょっこり出来ているのかもしれない。

(あの赤羽織がの)

信じられないことだが。

一方、赤羽織。

どうも、ひどく好色な男らしい。いや好色ではなく、剽気ているのであろう。

夕方、またこの男は町に出た。町がめずらしくてたまらぬ様子である。

「見えるぞ、見えるぞ」

といいながら歩いてゆく。

まるで、気狂いである。

見える、というのは、辻君のことだ。夕暮になると、辻君が、その名のおり、辻々にしゃがんでゐる。

ムシロを敷き、立て膝をしているのだ。白い脛がみえる。わざと見せている。その奥までが、ほのかにみえるような様子ぶりで、客を手まねいている。

「見えるぞ、見えるぞ」

と、赤羽織は、一人々々のひざをのぞきながら、無邪気な笑い声を残してゆく。それがまったく、この世に生きているのが楽しくてたまらぬという無垢無邪気な様子だから、どの辻君も、この男が通りかかると、われにもなく一種の陶酔感をもった。思わず惹きこまれるような気がする。

（これが、男の中の男か）

と知らず知らず口をあけて見送るような残香を、赤羽織はもっている。しかもいつのまに置くのか、どの遊女の前にも、永楽銭十枚をつんだひねり紙を置いてゆく。見えな駄賃なのか、それとも、神仏に賽銭でもおくつもりなのか。

翌日も、おなじである。

その翌々日も、

「見えたぞ、見えたぞ」

と、楽しげにのぞいては、すぎてゆく。ちゃんと賽銭がおいてある。

三日目には、町中の人気者になった。

しかも、乗りこんできた初日に、城士に対してあれだけの乱暴狼藉を働いたくせに、御城からはなんの苦情もない。例の足軽大將も、仕返しに来ようともしない。御城は、見て見ぬふりをしているようであつた。この男は、どれだけの特権があるのか。

四日目には、町を歩くと、賭博をしている群れも、市にむらがつている他国者も、みなこの男がやってくるに鄭重に頭をさげるようになった。いうなればこの町に、信長のほかにもうひとりの「王」ができたようなものである。

事実、四日目の夕暮、この男が、町はずれに立って、長い影をひきながら、ぼう然と稲葉山頂の白い城郭をながめ、「あの城を欲しやのう……」

と聞きずてならぬことをつぶやいているのを、耳にした者もある。

男は、城下第一の旅館「分銅屋」という家に従者とともにとまっている。

奥の間一室と、階下一室を借りきり、陽が落ちると町から帰ってきて、燈明一穗をひきよせ、夜がふけるまで独りで酒をのむ。

独りのときは、眼を伏せている。別人のように物憂い表情である。いちど、亭主の分銅屋三郎五郎が障子のすきまからかいまみて、あつと声をたてそうになったほど、さび

しげな表情であった。

じつところ、三日目の夜、織田家第一の出頭人木下藤吉郎が、家来もつれずに微行でやってきて、亭主に、

「あの客人、粗略にするな。ただし、よく見張るように。

あの者が何を言ったか、どういふことをしたか、毎日、わが屋敷へきて、つぶさに話してくれい」

と、砂金一袋を置いて行った。

むろん木下藤吉郎は、この赤羽織、熊野烏紋の旅の武士が、紀州雑賀(いまの和歌山市)の雑賀党という地侍集団の頭目、雑賀孫市であることは知っている。知っているが、亭主には、なにもいわなかった。

(なんの目的できたのか)

藤吉郎秀吉の知りたところである。

秀吉も、「雑賀党」というふしぎな集団のおそろしさは、戦国人の常識だけに、十分に知っているつもりである。

諸国の大小の合戦のばあい、雑賀党がそのどちらかに味方すれば、味方したほうが悪もなく勝つ、というのが、常識であった。

しかも、雑賀党というのは、いかなる大名にも属していない。頼まれて相手が入れば、出陣するだけのことである。むろん頼んだ大名は、戦勝後、金穀で謝礼を送るのだが。

雑賀党。――

戦国最大の鉄砲集団である。

渡来してまだ僅々二十数年にしかならぬこの新兵器は、どの大名もまだ十分にもっていなかった。だからこの火器を雑賀党ほど大量に持ち、しかも射術に精妙な武力集団は、天下見たしても、及ぶ大小名は、せいぜい、織田家ぐらいのものであった。それも量だけのことである。一発必中の射術にいたっては、織田家などは遠くおよばない。雑賀党をひきよせる者は、天下を取る、といわれたのは、この点である。

(その頭目の孫市が、意外にも城下に来ている)

信長が眼の色をかえたのも、むりはない。

お寧々

(途方もないやつが、お城下にまぎれこんだものよ)

藤吉郎は、沈思した。

よく拭きこんだ板敷に、燭台が一つ。二月の隙間風に、灯がゆれている。

「もうお寝りになりませぬか」

と、妻女の寧々が、隣室から声をかけた。

「そうじゃな」

藤吉郎は、うつろに返事した。

寧々は、面妖じゃな、とおもった。全身智恵と胆力のかたまりのような夫が、夜ふけにこれほど、思案にあぐねていることはめずらしい。

「どうなされたのでございます」

「まあ、よい。臥よう」

寝所に入った。

寧々はちかごろ、すっかり肉づいてしまつて、身動きすると、体のどこかでむいむい音が秘めやかに鳴るようになって

もわれる。

藤吉郎は、抱いてやった。

この男も、一手をあずかる大将になつてからは、あちこちで女を作りはじめたが、寝間の事はやはり寧々がいい。寧々の寝間には、つやがある。

「世におなごが幾千万いようと、そなたのほかには気は移さぬぞ」

抱いているときは、藤吉郎は本気で、ほとんど叫びだしたいような衝動でいう。

毎度である。

寧々も、それがうれしい。うそとわかつていても本気のうそほど楽しいものはなからう。下手な真実をいう亭主よりも、はるかに風情のあるものだ。

(藤吉郎殿は、禿げねずみのように容子のわるい男じゃが、かように心優しい亭主はまたとありませぬ)

充足しきつて、藤吉郎の愛撫に、身も心も応えている。

「藤吉郎殿」

寧々は、何度も叫ぶ。

「お寧々、おねね」

口を吸つてやる。寧々の小さな耳を噛む。藤吉郎もいそがしかった。寧々も、噛まれればそれだけのぶんだけ、うれしそうに声をあげてやるのだ。

寧々は、諸事、心得た女なのである。

藤吉郎が、ほうほうで女をつくっているらしいことも知っている。

しかし寧々はいわない。この亭主殿が、どのようなことがあっても自分との平和を崩さない男であることを知っている。事実、この亭主殿はふしぎな男で、よそに女ができればできるほど、寧々に心優しくなり、寝間も濃厚になるようであった。

「さきほどの御思案」

寧々は、そと身づくろいしながら訊いた。

「どのようなことでございます」

「おお、あれか」

藤吉郎は腹這いになりながら、例の赤羽織、熊野烏の定紋を背中に染めた男について、ひとくさりの話をした。

「厄介なのが、お城下に入りこんだものよ」

ごろっと肘まくらをして、

「なんのつもりではるばる紀州雑賀庄からやってきたのか、本音がわからぬ」

といった。

「藤吉郎殿のお智恵でもわかりませぬか」

「いやいや、およその推察はできるが」

「どんな？」

「織田家の実力を検分にきたのであろう」

「検分に？」

大名でもなんでもない、紀州の地侍の頭目にすぎぬ雑賀孫市なる者が、日本一の大名織田家の足もとを「検分」するだにおかしいのに、信長様ともあろうおひとが、なぜそれほど孫市ごときを怖れなさるのであろう。

寧々には、まるで怪談のように思える。

「もうし、藤吉郎殿。その孫市とやらは、家来多勢を連れて参ったのでございますか」

「なんの一人よ」

従者に「日本一」の旗をかつがせているが、この二人の小者も、道中、どこぞで傭った者らしい。

「一人の孫市が？」

「それが、怖いものよ」

戦国の複雑なところだ。

織田家は日の出の勢いとはいえ、密室で四方槍ぶすまにかこまれているようでもある。

「寧々、考えてもみろ」

越後には上杉謙信、甲斐には武田信玄、関東には北条越前には朝倉、近江には浅井、中国には毛利、そういう強豪が、たがいに国境を侵しあい、すきあらば京都にのぼって天下平定の旗をたてようとしている。

「幸い、わが殿は英主にあられる」

一昨年、いちはやく京都にのぼって市中を鎮制したが、天下をとったことにはならない。諸方の豪雄が互いに牽制